

六日市病院に台湾人医師

吉賀町六日市の六日市病院に台湾人の呉得進医師(64)が、常勤医師として着任した。日本の病院に10年間の勤務経験がある循環器内科の専門医。心疾患や高血圧に悩む高齢者が多い同町の医療を支えようと意気込んでいる。(江川裕介)

日本で勤務10年 循環器内科の呉さん



六日市病院で谷浦院長(右)と地域医療への意気込みを語る呉医師

台湾人医師から、六日市病院を紹介され、ことし3月に見学。患者との距離の近さや自然豊かな同町が気に入り、8月に着任した。

「培ってきた力を発揮し、地域医療に貢献する」と話す呉医師。積極的に若手医師に助言するなど職場にも溶け込んでおり「もっと日本語を磨き、患者や病院の仲間とコミュニケーションを深めたい」と張り切っている。

現在、日本式の電子カルテの入力方法などを勉強しながら堪能な日本語を生かし、週1回の外来を担う。併設の介護療養型老人保健施設の担当医として、高齢者10人の体調にも気を配る。

同病院は常勤医が6人から7人になった。高齢化が進む同町は、心臓病の患者が多いため島根大から月2回、循環器内科の非常勤医師の派遣を受けている。谷浦院長は「優しい人柄で臨床能力も抜群。年内には専門外来も持つてほしい」と期待する。

「吉賀の医療支えたい」

台湾南部に位置する生となり医学博士号を嘉義市出身の呉医師は取得し、89年まで京都府福井市などで勤務した。帰国後は中山医学大(台北市)を卒業後、大付属病院(台中市)79年に来日。京都大医学部(京都市)の研究の副教授を務めた。

退官が近づき、進路を考えていたところ、六日市病院の谷浦博之院長(56)と島根医科大(現島根大医学部)付属病院で一緒に働いた